

# 国宝慈照寺銀閣発掘調査と予察

引原茂治

## 1. はじめに

慈照寺は、室町幕府第8代将軍足利義政が営んだ山荘東山殿を前身とする。義政は文明14年(1482)に東山殿の造営に着手し、翌年、常御所が完成するとこの地に移り住んでいる。その後も東山殿の造営は続き、長享3年(1489)には観音殿(銀閣)が上棟するが、翌延徳2年(1490)に義政は銀閣の完成を見ることなく没する。以後、義政の遺命により、東山殿は慈照寺という寺院となる。戦国期の争乱によって、東求堂・銀閣以外の建物は失われ、慈照寺は荒廢する。江戸時代初期に大規模な整備が行われ、慈照寺はほぼ現在の姿に近い状況になったとされる。大正3年(1914)に銀閣の解体修理が行われ、礎石の下にコンクリート基礎が入れられる。

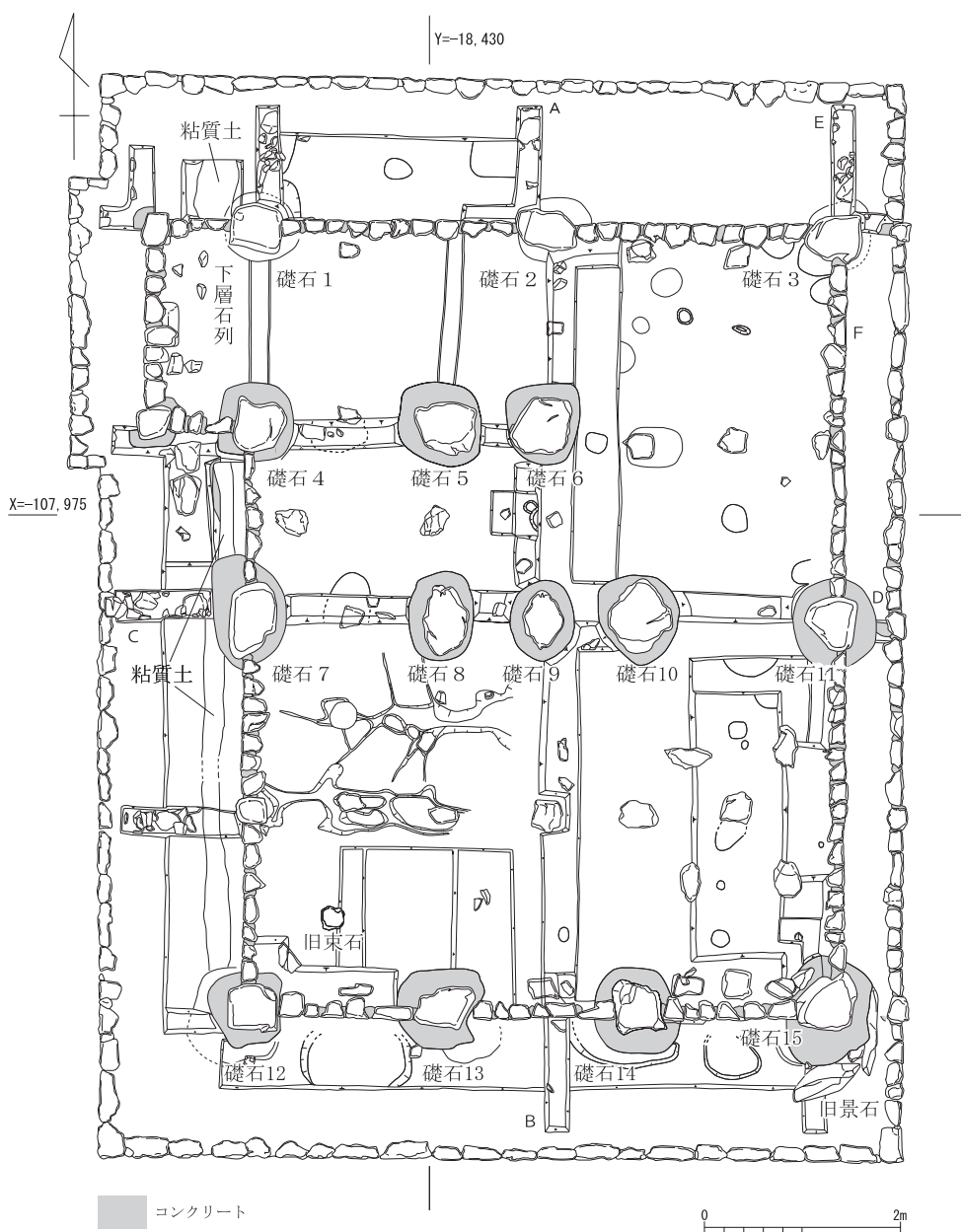
今回の調査は、国宝慈照寺銀閣保存修理工事に伴って実施した。調査期間は平成21年2月2日～3月6日と平成21年6月15日～6月29日である。

## 2. 層序

1層は、白灰色細砂質土で、大正時代の解体修理に伴う化粧土と考えられる。2層は、淡橙褐色砂質土で、大正時代の盛土と考えられる。

3層は、灰黄色砂質土で、堅く締まっている。大正時代以前のタタキ状の整地土と考えられる。4層も、3層と同時代に施された整地土と考えられる茶褐色砂質土である。これら2層は北側中央の礎石2では礎石の掘形の内部にまで及んでいる。銀閣の柱を受ける礎石の大半は大正時代にコンクリートの基礎を入れられているが、この礎石2ではコンクリート基礎が無い。以上の状況から見て、この礎石2は大正時代に動かされていない可能性がある。同様に、銀閣母屋部分北辺の東側および西側の礎石1・3についても、コンクリート基礎が無く、移動していないものとみられる。コンクリート基礎が入った礎石のうち、東西辺中央の礎石7・11でも、攪乱されていない部分で、3・4層の下降を確認している。なお、銀閣内中央から南側にかけて、3層上に堅く締まった層があり、大正時代以前に施された化粧土とも考えられる。

5層は、灰色砂質土で、礎石の掘形はこの層の上面から掘り込まれる。現地点における



第1図 調査地平面図

銀閣建立時の盛土層とも考えられる。礫を含み、茶褐色を呈する部分もある。なお、この層には落ち込み状の土色変化がみられるが、その性格は不明である。地業に伴うものか。この層には15世紀後半頃の遺物が含まれる。

6層は、黄茶褐色砂質土で、礫を含む。少量ながら遺物を含む。7層は黒灰色砂質土で、



第 2 図 調査地断面図



写真1 礎石2内側断面(東から)

炭片や拳大の礫を含む。13世紀後半頃の遺物を多数含む。これら2層は、北から南に向かって傾斜して堆積しており、銀閣以前の堆積層もしくは5層と同様の盛土層とみられる。

なお、銀閣内部南半部で、東西方向の亀裂および断層を確認した。これは、大正時代以前とみられる層におよん

でいる。亀裂は最大幅25cmである。亀裂の南側39cmには、北から南に斜行する断層がある。亀裂の北側と断層の南側では、3層上面のレベルで8cmの段差が生じている。

### 3. 検出遺構

1・2層を除去した段階で、南西隅部から礎石1個を検出した。大正時代以前の盛土(3層)上に置かれており、大正時代以前の床束の礎石とみられる。

このほかに、土坑状、ピット状の窪みや、杭跡状の小ピットを検出した。ほとんどが、大正時代以前の盛土(3層)上から検出した。なお、これらの遺構は、一部わずかに掘り下げたのみで、ほとんど掘削していない。

銀閣南東隅の礎石15の外側で、旧景石とみられる石列を検出した。礎石15の南東側を囲むように2個の石材が並ぶ。東側の石材には、大正時代に礎石15の下に入れられたコンクリートが付着している。これらの石材を池畔の景石の一部と考えると、かつては東側の池がさらに銀閣側に寄っていた可能性も考えられる。また、大正時代に増築された北西側の入り口部では、それ以前の時期の石列の一部を確認した。以前の縁石の一部か。

銀閣外側では、西辺・南辺で、橙黄灰色粘質土を検出した。西辺では、北方向に伸びる状況を確認しているが、北辺側には屈曲していない。西側の粘質土の外側で、大正時代以前の盛土中から、16世紀の信楽焼掻鉢片が出土した。粘土帯外側の盛土は、その時期以降のものと考えられる。

#### 4. 出土遺物

調査では中世を中心とする遺物が出土した。量的には土師器皿が多いが、ほとんど小片であり、明確に時期を知ることのできる遺物は少ない。中世の遺物では、15世紀頃のものが多い。また、7層から出土した土師器皿などの13世紀頃の遺物も注目される。前者は東山



写真2 南東隅検出旧景石(南から)

殿および慈照寺に、後者は前身の浄土寺に関係する遺物か。中世の遺物以外では、古代に遡るとみられる土器等や、近世の陶磁器などが出土している。また、大正時代の解体修理に伴うものと考えられる建築用小金具なども、地表付近で出土している。以下、図化できた遺物について概観したい。

##### ①土器・陶磁器

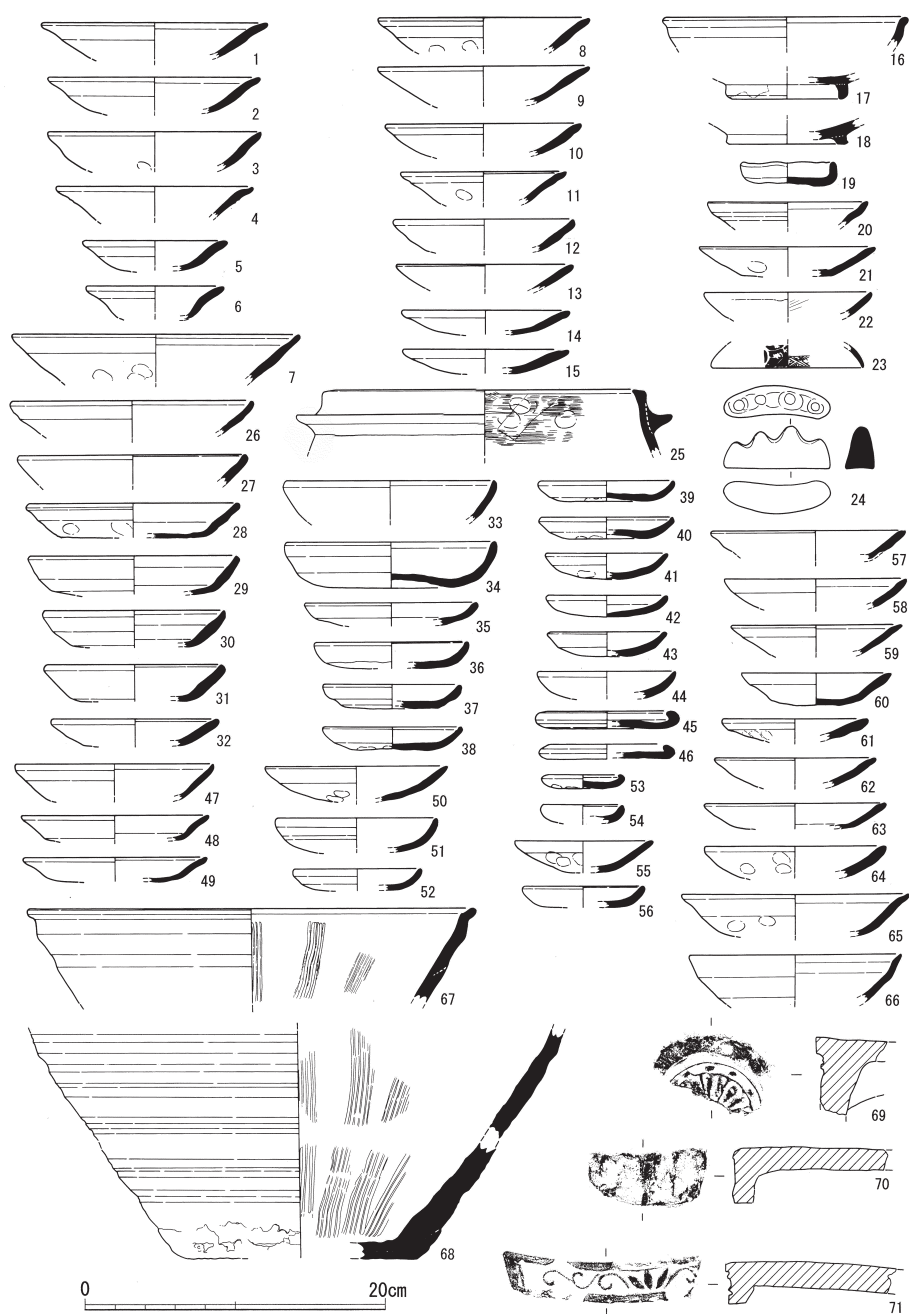
土師器皿1～6は、銀閣内部の大正時代以前の層から出土した遺物である。口縁部は外反気味で、色調は淡橙褐色を呈する。中型のもの(1～4)と小型のもの(5・6)がある。15世紀後半頃のものと思われる。

土師器皿7～15は、銀閣内部の精査、断割作業中に出土した遺物で、含まれていた層の特定はできない。12は、口縁部の形状から13世紀頃のものと思われる。15は色調が淡褐色で、16世紀頃のものと思われる。その他は、15世紀頃の製品と思われる。

16～25は銀閣内部の大正時代盛土から出土した遺物である。16・18は須恵器碗の一部、17は灰釉皿の底部である。これらは、平安時代の遺物とみられる。19・20は15世紀頃の土師器皿である。21は扁平な底部から口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がる土師器皿で、16世紀後半頃のものと思われる。22は京都もしくは信楽産の陶製灯明皿、23は肥前磁器(伊万里)の碗蓋、24は陶製の筆架である。これらは、18世紀末頃から19世紀にかけての遺物とみられる。なお、筆架の底部には、「宮崎千代□」の墨書および朱書が残る。25は中世の羽釜である。

26～46は銀閣北外東端の断割で検出した7層から出土した土師器皿である。二段ナデ調





第3図 出土遺物実測図

整のものもあり、コースター型のものも含まれる。13世紀後半頃のものとみられる。47～54は、銀閣北外側の大正時代層および断割から出土した土師器皿である。13世紀頃のもの(47・51・52)と15世紀頃のものがみられる。

55・56は銀閣東外側から出土した土師器皿である。中世のものとみられる。57～61は銀閣西外側から出土した土師器皿である。61が14世紀頃のものと考えられるが、他は15世紀頃のものとみられる。67・68は、同じく西外側の大正時代以前の層から出土した信楽産播鉢である。内面には櫛引きの疎らな播目がある。16世紀の製品である。62～66は銀閣南外側から出土した遺物である。62～65は中世の土師器皿である。66は古瀬戸灰釉碗で、口縁部が括れ気味になる。16世紀の製品か。

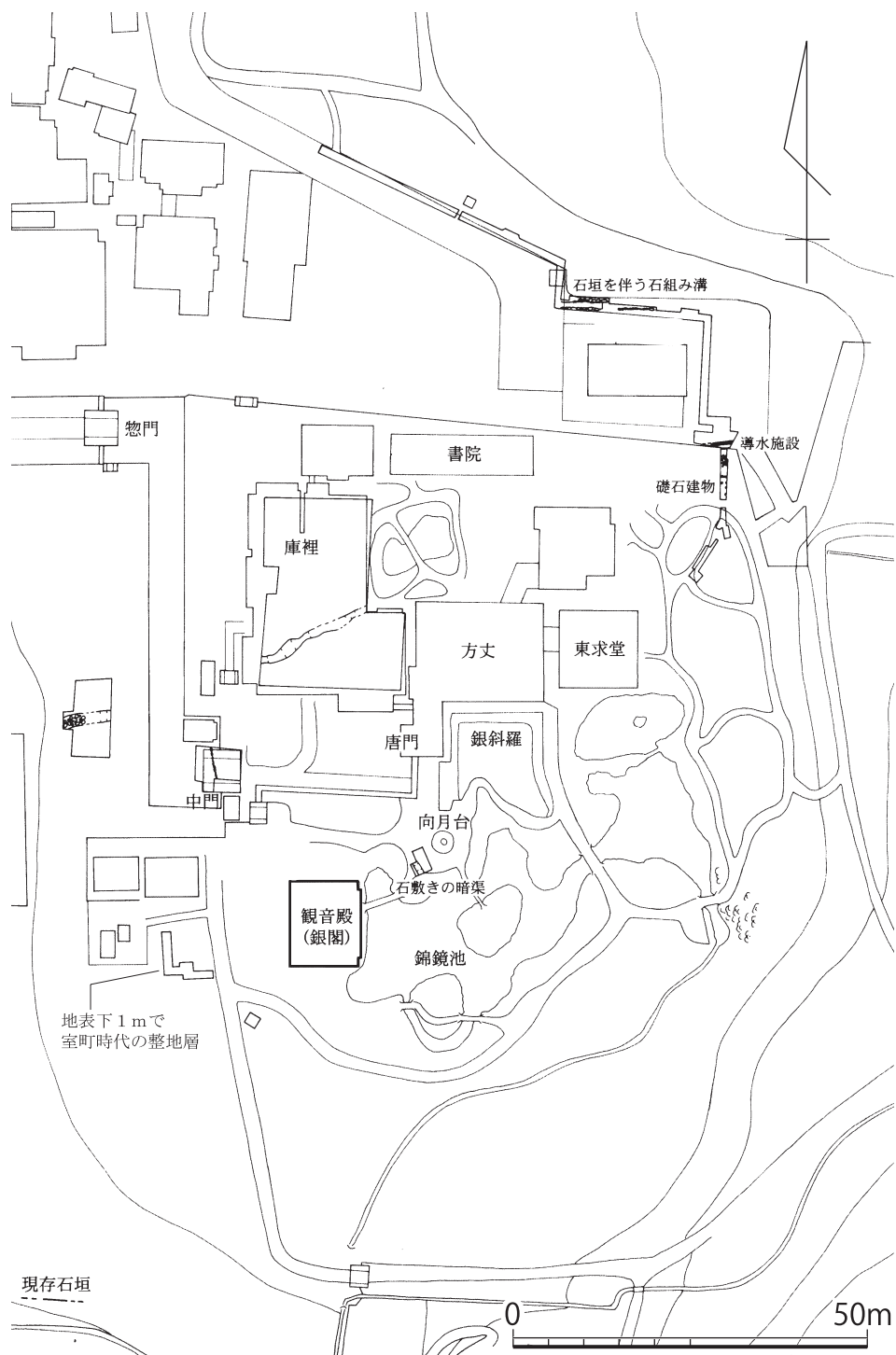
## ②瓦

瓦69は小型の蓮華文軒丸瓦である。蓮華文の周囲に珠文が巡る。銀閣内部南半部の亀裂埋土から出土した。瓦70は瓦当面が荒れているが、わずかな残存部分の状況から、剣頭文軒平瓦とみられる。大正時代以前の層中から出土した。これらは、平安時代後期頃の瓦とみられる。瓦71はやや小型の唐草文軒平瓦である。16世紀頃のもののか。銀閣北外側の大正時代の層から出土した。

## 5. 予察

今回の調査では、銀閣母屋部分の礎石のうち、北辺の3石については、大正時代以前の段階から動かされていない可能性が高いことを確認した。これらの礎石は、正方位に沿って東西に並んでおり、現在の銀閣も正方位に沿って建てられている。これまでの境内の調査結果から、東山殿造営の主軸方位は、北で西に振れる方位であり、江戸時代初期に正方位へ転換された、という説がある<sup>(注1)</sup>。今回の調査では、大正時代以前の層からは、15世紀後半頃の遺物が出土しており、明らかに近世のものとみられる遺物は含まれていない。少ない遺物からの推測ではあるが、大正時代に動かされていない礎石を支える整地層は、東山殿造営時のものである可能性が考えられる。また、境内北側で行われたこれまでの調査で検出された東山殿に関係すると考えられる溝や石垣なども、正方位に沿って造られている<sup>(注2)</sup>。このようなことから、東山殿は当初から正方位を基本的な造営主軸方向としていた可能性が高い。

銀閣とともに東山殿の現存建物である東求堂は、当初現在の向月台の位置付近にあったものが、江戸時代初期頃に現在地に移建されたと考えられている<sup>(注3)</sup>。そのため、銀閣も当初の位置を保っていないのではないかと考えられていた。今回の調査結果から考えると、銀閣は当初の位置から移動していない可能性がある。足利義政は、いわゆる東山文化の主



第4図 慈照寺境内図(注1文献図5に加筆、転載)



催者であり、銀閣が義政の意図した場所に今も建ち続けているとすれば、まさに東山文化の定点と言えよう。

銀閣西側では、建物の西辺に沿って帯状にのびる橙黄灰色粘質土を検出した。粘質土の内側には15世紀後半頃の遺物を含む整地層が残るが、外側の大正時代以前の盛土中からは



写真3 調査地(北から)

16世紀頃とみられる信楽焼の播鉢片が出土している。外側の盛土は16世紀以前には遡らないものと考えられる。戦国期に衰退した慈照寺の歴史を考えると、この盛土は江戸時代初期の整備時に施されたとみるのが妥当であろう。場所柄、掘削深度に制限があり、現地表下40cmまでしか掘削できなかったが、盛土はその深さに及ぶ。銀閣の西側で行われた調査でも、現地表下0.9～1 mで室町時代の整地層が確認されている<sup>(注4)</sup>。このような状況から、銀閣の西側は、低地であったことが予想される。西側の粘質土に沿って、外側に石列があり、銀閣敷地の護岸及び景石の基礎とも考えられる。そのように考えると、銀閣西側の低地は池であった可能性もある。銀閣南辺でも帯状の粘質土を確認しており、西側と同様の状況が想定される。銀閣東側では粘質土の確認には至っていないが、南東隅部で、礎石15の南および東側を囲うように2石がL字状に並ぶ状況を検出した。銀閣東側は、現状でも池に面しているが、この2石を以前の景石と考えると、池の岸がさらに銀閣側に寄っていた可能性がある。銀閣周辺が現状のようになったのが江戸時代初期頃とすると、この2石はそれ以前に置かれたものと考えられる。

以上のような状況を総括すれば、銀閣は、池の北岸から半島状に池中に突出した場所に南面して建てられていたものと想定される。銀閣の上層は、南面では中央に棧唐戸を設け、その左右に花頭窓を配する。北面は中央に棧唐戸を設けて、左右は板壁となる。東西面は、やや張り出した3間の腰掛部分に3つの花頭窓を並べる。このような上層の状況を見る限り、銀閣は南面を正面とする建物であり、かつては、池を挟んだ南側から観音を拝するようになっていたものと考えられる。室町幕府第3代将軍足利義満が造営した北山殿(鹿苑

寺)の金閣も同様の立地である。場所的に、金閣周辺ほど広壮ではないが、類似した景観であったものと想定される。

また、建造物の関係では、銀閣上層軒下部に彩色があったことが確認されている<sup>(注5)</sup>。彩色の当りとみられる亀甲形の刻線が残存している。銀閣は、下層が書院造の住宅風、上層が内外面黒漆塗の禅宗様寺院風で、軒下が極彩色という建造物ということになる。現在の状況とは若干印象が異なる銀閣が想定される。発掘調査や建造物調査の成果から考えられる銀閣の状況は、足利義政や彼を取り巻く時代の様子、それらを包括した広い意味での東山文化を考える上で、重要な資料となろう。

## 6. 終わりに

今回の調査では、良好に残存している整地層を保存するため、掘削は最小限におさえた。したがって、得られた資料も部分的なものである。この小文は、仮定の上に仮定を重ねたような結果になった。限られた範囲での調査であり、それを基にした小文は、あくまで可能性を記述したに過ぎない。国宝建造物が建ったままの状態での調査であり、それを倒壊させないことが最優先されるので、礎石下などの状況も十分にわかったとは言えない。今後、銀閣が解体修理される時が来て詳細な調査が行われれば、また新たな知見が得られると思う。今後の調査に期待したい。なお、出土遺物については、当調査研究センター伊野近富氏からご教示いただいた。感謝したい。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査第2課主任調査員)

注1 「史跡慈照寺(銀閣寺)旧境内」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-1』財団法人京都市埋蔵文化財研究所)2003

注2 ①「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」(『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所)1996

②「史跡慈照寺(銀閣寺)旧境内」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』財団法人京都市埋蔵文化財研究所)2008

③「史跡慈照寺(銀閣寺)旧境内」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-11』財団法人京都市埋蔵文化財研究所)2009

注3 川上貢「北山殿と東山殿」(『金閣と銀閣』淡交新社)1964

注4 注2文献①に同じ。

注5 京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当(当時)中尾正治氏のご教示による。刻線についても、実見させていただいた。